

■フロー（流れる）情報とストック（積み重ねる）情報

情報

フロー情報



ウェブメディア、新聞、テレビ
時代に追いつくための知識

ストック情報



本
世界観や知見を身につけるもの

確かな世界観を磨くための読書術

ビジネスリーダーのための厳選5冊

コロナ禍は落ち着きを見せてきたものの、世界各地の紛争は収束せず、経済情勢も不透明な状態が続いている。先を見通すにはどのような情報収集力が求められるのか。作家・ジャーナリストの佐々木俊尚氏が、確かな世界観を磨くための読書術といま読んでおきたいビジネスリーダーのための厳選5冊を紹介する。



佐々木 俊尚
(ささき としなお)
作家・ジャーナリスト

1961年兵庫県生まれ。毎日新聞社などを経て2003年に独立し、テクノロジーから政治、経済、社会、ライフスタイルにいたるまで幅広く取材・執筆・発信している。総務省情報通信白書編集委員。『読む力 最新スキル大全』『Web3とメタバースは人間を自由にするか』『時間とテクノロジー』など著書多数。X(旧Twitter)のフォロワーは約79万人。東京・長野・福井の三拠点移動生活中。

フロー（流れる）情報と ストック（積み重ねる）情報

情報というものは、大ざっぱに分ければ二つに分けられる。ウェブメディアや新聞、テレビなどで目の前を流れていく情報と、書籍を読むことで自分の頭脳に積み重なっていく情報である。それぞれフロー（流れる）情報、ストック（積み重ねる）情報と呼ばれている。フロー情報は、いまの時代を追い抜いていくためには必ず必要である。いくらたくさん本を読んでストック情報を貯め込んでいたとしても、現代のテクノロジーや経済を知らないのでは、ただの「古い知識の人」になってしまうから

だ。一方で、フロー情報だけに頼るのも良くない。

たとえば「チャットGPTという人間と会話できる斬新なAIが発表された」というニュースについて考えてみよう。テクノロジー系の専門メディアで記事を読めば、「チャットGPTはどんなAIか」「今までのAIとどう違うのか」「チャットGPTは何ができるのか」というざっくりした情報は手に入る。記者は開発元のプレスリリースをもとに記事を書いているので、他のメディアにも同じような記事が出る。どの記事からも、得られる情報は似たり寄ったりだ。いくつか読めば、チャットGPTについてのひととおりの

知識は手に入る。会社で上司や同僚と「チャットGPTってこういうものらしいね」という会話ぐらいはできるようになるだろう。

これでいちおうはチャットGPTという「時代の最先端」をキャッチアップはできている。しかしそれだけでは理解は深まらない。そこで書籍の出版となる。チャットGPTはまだ登場して一年にもならないので詳しい書籍は少ないが、AIについての書籍は日本語でも膨大に刊行されている。「AIはどのように進化してきたのか」「AIと人間の関わり合いとはどのようなものなのか」「このままAIが進化していったら、社会や産業はどう変わるのか」といった、

GIVE & TAKE
 「与える人」こそ成功する時代
 アダム・グラント著／三笠書房

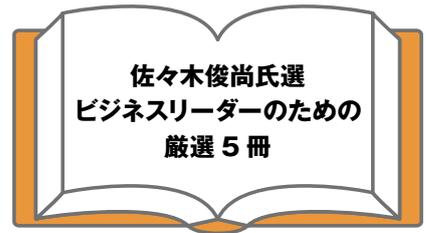


人間をギバー（人に惜しみなく与える人）、テイカー（まさきき自分の利益を優先する人）、マッチャー（損得のバランスをつねに考える人）の三種類に分類するという面白い着眼。自分は何の分類に当てはまるのかを認識し、人生の指針にしたい本。

聞く技術 聞いてもらう技術
 東畑開人著／ちくま新書



現代のコミュニケーションに必要なのは「しゃべる能力」ではなく逆に「聞くこと」「聞いてもらうこと」であるという、非常に鋭い指摘。組織を見える化するだけでなく、個人が隠れていられる静かな場所を残しておいたほうがいいという指摘など、ビジネス書的な内容なのに温かな視点に満ちあふれている。



メディアのフロー情報は得られないような知見を学ぶことができず。これがストック情報の意味である。より多面的な視点から、より深く掘り込んで、あるテーマについての全体像をつかむことができるようになるのである。

すべては楽しみのために 自分のために読む

フロー情報とストック情報は、どちらが欠けてもいけない。この複雑な世界を生き抜いていくためには、両方とも必要だということ覚えておきたい。

「本を読む」というと、「居ずまいを正して難しくぶ厚い本に向き合わなければならぬ」と緊張してしまう人も多い。しかし本は、勉強のためだけに読むとうとすると、読者をはねつけてしまう。途中で嫌になって本を放り出したくなったり、眠くなったりしてしまふのだ。「この本は勉強の本」「この本は仕事のための本」と読み始めると、つらくなり面倒になってしまったという経験は、多くの人がしているだろう。娯楽や暇つぶしのための本ならいくらでも読めるのに、なぜ「勉強の本」「仕事の本」はイヤな気分になってしま

うのか。

ここは発想を転換して、「すべては楽しみのために、自分のために読むのだ」と考えることにしよう。「でも難しい本は楽しめない」と反発する人もいるだろう。だったら難しい本など読まなければいいのである。代わりの手段を考えればいいのである。

本の内容を知る手段は いくらかもある

たとえば2013年にフランスの経済学者トマ・ピケティが書いた『21世紀の資本』（みすず書房）という世界的なベストセラーがある。これからの未来はいくら働いても格差が広がっていくばかりになるということ膨大なデータをもとに分析した名著だ。世界で300万部も売れた本なので、ビジネスパーソンなら読んでおかなければと思う人は多いだろう。

しかしこの本は、日本語訳でもなんと728ページもある。内容も専門用語が多く難しい。これを最後まで読み通せる人は、そんなに多くないだろう。ハードルが高いのだ。だったら5000円以上もするこの本を無理して買わなくてもいい。そのかわりに『21世紀

の資本』には、映画版があるからだ。一般の人でも理解できるよう、難しい数式などをいっさい使わずに映像でわかりやすく表現している。読めば何日もかかりそうな同書も、わずか1時間40分ほどで理解してしまえるのだ。

このように有名なベストセラーであれば、映画版やアニメ版、漫画版が出ていたりする。たいていは解説書も数多く出ている。たとえばアメリカの人類学者が書いた『ブルシット・ジョブ——クソどうでもいい仕事の理論』は、なぜ現代の会社には無意味な仕事が多いのかを説明した良書だが、これもぶ厚く値段が高く難解だ。お金と時間をかけてこの本を苦勞して読むぐらいなら、酒井隆史さんという大学の先生が書いた『ブルシット・ジョブの謎 クソどうでもいい仕事はなぜ増えるか』（講談社現代新書）という新書版の解説書を読んだ方が、ずっとわかりやすい。ずっと頭の中に入ってきてくれる。おまけにページ数は半分ぐらいだし、本の値段は4分の1である。

自分にとって良い本は ジャンルを超えて

さらに付け加えて言うと、読ん

Chatter「頭の中のひとりごと」を
コントロールし、最良の行動を
導くための26の方法
イーサン・クロス著／東洋経済新報社



Chatter（チャッター）は、頭の中
にどうしても入り込
んできてしまうネガ
ティブな思考や感情
の渦のこと。目

の前のトラブルに近視眼的に悩むのではなく、「十年後の自分なら今の自分をどう見るだろうか」と俯瞰的に見れば、自分の経験が一時的なものにすぎないと理解し、希望が湧いてくる。

LIFE SHIFT2
100年時代の行動戦略
アンドリュー・スコット、
リンダ・グラットン著／東洋経済新報社



人生100年時代を
どう生きるかを解説
した世界的ベストセ
ラーの続編。前作
よりもさらに具体的
に、長くなっていく

生のライフスタイルの実践を提案している。「年齢を重ねることを前向きに捉えている人」は、否定的な人より平均7.5年長く生きるという話など、様々なファクトが散りばめられている。

人類とイノベーション
世界は「自由」と「失敗」で進化する
マット・リドレー著／
NewsPicks パブリッシング



イノベーションはた
くさんの人の協力や
共有が必要で、たっ
た一度のアイデアで
はなくゆるやかな連
続プロセスであり、
それまでに積み重ね

られてきた様々な技術やアイデアの延長線上にある。だから交流や雑談など人と人との関係性が大事なのだという結論は、企業の組織の有りようについても深く考えさせられる。

だ方がいい本は「名著」や「ベストセラー」だけではない。様々な価値観や新しい考え方、哲学、教養などを自分に与えてくれる本は、すべて自分にとっては良い本なのだ。わたしは歴史書や哲学書をたくさん読んでいるが、それと同じぐらいにビジネス書や漫画も読んでいる。たとえば漫画で言えば、しばらく前に完結した『進撃の巨人』（講談社コミックス）はその世界観のスケールの大きさといい、人の心の観察の奥深さとい、社会が常にはらんでいる矛盾の認識といい、そこらの歴史書や哲学書では太刀打ちできないような凄みを持つている。このような素晴らしい漫画に出会うことも大切なのである。

ビジネス書も、社会や仕事に対する深い洞察をめぐらせている素敵な本が多い。

前世紀の古くさい哲学書を読むむぐらいだったら、最新のビジネス書を読む方がずっと人生を豊かにしてくれると感じる。

ただビジネス書で気をつけなければならぬポイントが、ひとつある。経営者の書いた本を読むときには「後出しジャンケン」に気をつけよ、というポイントだ。

自分の頭脳を健全に保つために 良い本をきちんと読む

成功した経営者の自伝を読むと、「わたしはこうやって成功した」「あなたもこうすれば成功する」という文言があふれている。中には成功の法則をセオリー化できているケースもあるが、いつばうで「結果論」をセオリーだと思

い込んでしまっている成功者も実はけっこう多い。成功した経営者はほとんどが超優秀なのは間違いないが、超優秀だからといって全員が成功できるわけではないからだ。優秀であることは成功のために必要だが、優秀であるだけでは十分ではない。そこには良い人との出会いや運や、その他の様々な要素もからんでいるのである。

だから成功者から見習うとすれば、その紆余曲折ぶりを学んだ方がいい。成功者はみんな様々なハードルにぶつかって、無数の分岐を経て、それでなんとか成功へとこぎ着けた。失敗や挫折もたくさんつまっているそういう道のりにこそ、成功のための秘訣が実はひそんでいるのである。だから失敗話がたくさん書かれている経営者本を、わたしはお薦めしたい。

自己啓発本も気をつけた方がいい。自己啓発本は、「元気を出して」「よしがんばるか！」と気合を入れるためには時には必要だ。しかしこれはしょせんはカンフル剤のようなものである。読んだすぐ後には元気が出るような気がするけれども、それはいつか「カラ元気」でしかない。健康な食事をとらずにカンフル剤ばかり飲んでいく人がだんだん健康を損なっていくのと同じで、自己啓発本にだけ頼っていてはならない。健康な食事、つまり良い本をきちんと読んでいくことが、自分の頭脳を健全に保っていくために大切なのである。

栄養をたっぷり含んだ食材を偏りなく摂取し、おいしく食事をとることこそが健康の秘訣。わたしたちの頭脳もそれと同じである。フロー情報をしっかり取得して時代にキャッチアップし、本というストック情報で自分の頭の中に確かな世界観や知見を蓄積していく、社会や経済や産業を理解する土台を作っていく。そうやってわたしたちは健全な頭脳を構築し、難しくややこしい仕事にも立ち向かっていくことができるようになるのだ。